
勘違い

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違い

【Nコード】

N2339Z

【作者名】

潤

【あらすじ】

沢村 慧と同じクラスの

鈴村 海李と慧の幼馴染の

瀬戸 味來が沢村に好意を寄せていた。

学園恋愛ものです。

決意

俺は沢村 慧。

「慧ー。あれしといてー」

「あいさー」

俺に指示したのは

クラスメートの鈴村 海李。

まあ可愛いちゃあ可愛い。

っーか『あれ』は黒板消しであつてるよな？

――――

「海李ー。」

沢村と仲いいよねー」

「そんなことないよー」

「さっきだつて、あれしといてで通じてたしさー。」

ホントのとこどーなのよ？」

「黒板消しは先生が私か慧に

頼んでる仕事だから慧に押し付けても

問題ないでしょ？

ホントのとこどうつて？」

「好きかそうじゃないかに

決まってるじゃない」

「もうー夏奈子はすぐに

そついう方向にもつていこうとするー」

「で、どうなのよ？」

「まあ悪くはないわね」

「よし、じゃ沢村にコクリに行こう」

「なんでそつなるの？」

別に好きだなんて言っていないんだから……」

「あ、先生ー。」

黒板消し終わりましたー」

ちょうど通りかかった担任に

黒板消し終了の報告をした。

「そっか。」

毎度悪いな。

帰っていいぞ」

「はい」

鈴村に毎日頼まれてる黒板消しのせいで

俺は帰るのが他の奴らよりも少し遅い。

まあ別に構わんが…。

というか鈴村はなんで

俺のこと慧って呼ぶんだ？

「けーいー。一緒に帰ろ」

ああ、こいつもご苦労なこつたあ。

毎日毎日俺を待って。

こいつの名は瀬戸 味來。

まあ俺の幼馴染みだ。

こいつの学力をもつてすれば

もつと上の高校行けたのに、

なぜかこの平均あたりのこの高校に通っている。

顔はまあこれを言うと

失礼だが地味なほうである。

ただ中2の時に見た

メガネを外した顔はかなりかわいかった。

「おう。」

毎度悪いな。

それよりメガネは外さないのか？」

これは俺が味來に毎日いう言葉だ。まあ挨拶がわりだな。
「外さないよ」

これがお決まりの返事だ。
テクテク。

毎日話すことがよくきれいなと
思うくらい味來は話す。

川原に鈴村がいた。

俺は全く気がつかなかった。

「慧！」

「味來…お前は…」

「けい。呼ばれてるよ」

「つてこらー。無視すんなー」

そこで俺は鈴村がいることに気がついた。
横にその友達もいた。

「ん、ああ、鈴村か。」

黒板消しならきちんと終わらせたから安心しろ」

「そんなの当たり前でしょ」

「なんか用か？」

鈴村の友達がツンツンと鈴村をつついていた。

「何？」

かなり小声で話し出した。

「横に女子がいるよー」

ニヤニヤしながら鈴村の友達は鈴村に話しかけている。

「確かに…」

「彼女だったりして？」

「…」

俺は味來と話していた。

「あの子誰？」

「クラスメートの鈴村 海李だ。
なんか知らんが俺とあいつで
黒板消し係りになってる」

「ちよつと、なんか知らんがって何よ！
あれはあんたが悪いんでしょ」

「はあ？何が？」

「黒板消し係りになったのは…」

「俺なんかしたか？」

「したわよ」

俺には全く心当たりがない。

「あれはクラス替えした直後で

私が放課後に芸術的ともいえる絵を

黒板に書いて帰った。

次の日に慧のが早く来てて

その絵を消してて、

それに怒った私と黒板の前で

口げんかしてたら先生が来て、

『あ、沢村と鈴村お前ら黒板消し係りな』

って言われたからじゃない」

「芸術的ともいえる絵？このことか？」

俺は携帯から多分その絵であろう写真をみした。

「それよ！あんた、それ私に送って！」

「俺、鈴村の携帯番号つかアド知らねえ」

「そんなの紫外線で送るから」

「あ、それ赤外線…」

味來がつつこんだ。

「そーそー赤外線」

ピピピ。

ピロリン。

鈴村のアドと番号を入手した。

「ほい、送ったぞ」

「来た来た」

「味来。」

鈴村の芸術的ともいえる絵見るか？」

「みたい、みたい

……………何これ？

ミミズがのたうちまわってる？」

「味来、お前はストレートに言い過ぎだ」

「何よ。」

わからない？

ミミズじゃないのよ、これは龍よ」

「よう似たもんじゃ……………」

俺は思わずつつこんだ。

が、よく考えれば似ていない。

「慧、美術の成績悪いでしょ？」

「2だけど文句あつか」

「ほーらね」

「鈴村、名誉毀損で告訴したるか…？」

「ごめんやん。そんな…」

ビシッ。

鈴村が友達にどつかれていた。

「帰ろうぜ、味来」

「う、うん」

—————

「誰が告訴されそうになってんねん」

「私」

えへへと照れながら鈴村は自分を指差した。

「あんたがするかされるかは告発や」

「いや、それ絶対違うよ…」

「あ、告白の間違い」

「わかってるから…」

今、私は慧のこと好きだって、
自覚したもん。

あの女の子と一緒に帰ってるの
見て悔しかったもん」

「それならちゃっちゃと告白しなよ」
「夏奈子…」

あの子が彼女だったら私、
フラれるじゃん。

もっと仲良くなってから告白する！
というか慧からさせる！」

誕生日プレゼント

俺は暇つぶしにベッドで携帯をいじっていた。

カレンダーをみてたら

今月の末に誰かの誕生日が入っていた。

今まで今月末に誕生日なんていなかったぞ。

ということは…誰だ？

俺はおそろおそろその日付までいった。

そこにはく鈴村 海李>とあった。

ああ、鈴村の誕生日か。

って知った以上は何かおくるべきか？

いやいや待て待て。

俺は祝われてないぞ。

でも、俺の誕生日は3月だしな…。

なんかあげるべきか…。

かといって別に好きでもない奴から

もらった誕生日プレゼントなんて迷惑か？

メールで聞くか？

いや、こういうのって

サプライズだから意味があるんだよな。

というか鈴村の好きなものって何だ？

いや、ここは鈴村じゃなくて

一般的な女子と考えてみよう。

一般的な女子……………。

俺の周りには普通の女子がいない。

味来はまあ普通だが…

どこか少し他人と違うところがあるからなあ。
うーむ…。

物は試した。

味來に聞いてみるか…。

俺は携帯をとりだし

瀬戸 味來に電話した。

<あ、もしもしー。味來か？>

<うん。そだよ>

<あんさー例えばだが男子から

誕プレもらえたら何がいい？>

<え、今年の誕生日は

けいからは組み立て式の本棚もらったよ？>

<いや、それは味來がマンガがいっぱい本棚が足りない
っていつてたからあげただけだし…。

普通の女子としての意見がほしいんだ…>

<んー誰かにあげるの？>

<いや、まだあげると決めたわけではないけど…

あげるべきかどうか悩んでる…>

<あーもしかして川原にいた女の子に？>

<……そーだよ>

<あーあういう子にはアロマキャンドルとかはどうか？>

<アロマキャンドル？>

<デパートとか行ったら売ってると思うよ>

<そっか。ありがとーな>

アロマキャンドルか…。

確かに鈴村にあいそうだな。

今度の日曜日に買いに行くか…。

けい…。

私以外の女の子にプレゼントあげるんだ……。
はあ…。

私はけいのが好きだけど…。

けいはときどき私を女の子扱いしてないときあるのに…

あの子はちゃんと女の子扱いされてる…。

私、けいに告白してみよかな？

でも、今のけいとのなんとも言えない関係が壊れるのが怖い…。
すごく怖い…。

私、どうしたらいいんだろ？

………けい

日曜日。

俺はアロマキャンドルを探しに近くのデパートに来てた。
えーとアロマキャンドル売り場はねえな。

どっかの専門店で売ってっだろ。

俺はそれらしき店を発見した。

しかしあまり入りたくない。

だってよ、店の外から見える中がまっピンクだぞ。

あきらか女の子向けだぞ。

そんな中に男がいんだぞ。

どれだけ勇気がいるか…。

でも知恵をくれた味来を無駄にはできない。

ということ俺はおそろおそろ入った。

なんだ、この匂い。

まるで別世界に来たみたいだぞ。

まあいい匂いだが…。

さてと探すはアロマキャンドルだ。

ここに長居は無用だ。

つてことで手っ取り早く店員に聞くか。

ちようどヒマそうにしてた店員に聞いた。

「あの、すみません。

アロマキャンドルって売ってますか？」

「え、あ、はい。取り扱っております」

「どこですか？」

「えーと…少しついてきてもらえますか？」

「はい」

そして店の端にアロマキャンドルコーナーがあった。

「ありがとうございます」

そして俺はどのアロマキャンドルがいいか吟味しだした。

「ん〜これが…」

俺が手に取ったのはローズの香りがする

アロマキャンドルだった。

他にもいろんな匂いがあつたが

鈴村にはこれがなんかこれがしっくりきそうだ。

ということでローズの香りがするアロマキャンドルを買った。

「あの、すみません。

これ友達に贈りたいんでラッピングしてもらえませんか？」

「はい。かしこまりました。

包装代として+100円になります

がよろしいでしょうか？」

「わかりました」

「それではお会計のほう

が498円になります」

なんだ500円もかからないじゃないか…。

安くすんでよかった。

その後店を出たら、ある人物に出会った。

「慧！なんであんたがこの店から出てきたの？

ここ女の子に人気の店なのに…

まさかあの時の彼女にプレゼント買いに来たとか？」

俺を慧と呼ぶのは鈴村以外には両親くらいだ。

つまり出会ったのは鈴村だ。

しかも彼女だあ？

訳わかんねえ…。

「よう、鈴村。

まあいろいろとあつてな…

っ！か彼女は俺にはいねえぞ」

「じゃなんで一緒に帰ってたの？

下の名前で呼んでるの？」

「ああ、味來のことか。

あいつとは幼馴染みで小さいときから

一緒に育ってんた。

だから登下校は一緒だし味來って呼んでる」

「じゃ私も……………」

下の名前で呼んでよ……………」

「鈴村は鈴村だろ。

海李って呼ぶのはなんかまだ早い気がするよな…」

「私達友達だよね？」

「そーだな、友達だな」

「うん。じゃ誰にあげるためにこの店に入ってたの？」

「う…」

まさか鈴村のために買いに来てたとは言えないしな…。

「まあなんだいろいろとあんだよ」

「怪しい…」

「それじゃな。俺は急ぐんでな…」

ポロリ。

今日買った鈴村へのプレゼントが落ちた。

まあ割れる音はしてなかったから大丈夫だろう…。

「ふうーん。キレイにラッピングまでしてもらってる」

「そーいうことだ」

俺は拾って去っていった。

あぶねー。

もうちょいでバレるとこだった。

――――

鈴村の誕生日の日。

鈴村は女友達からは誕プレをもらっていた。

……。

俺はいつ渡そう…。

予定としては朝渡すつもりだった。

が、鈴村が時間ギリギリに来たから渡せなかった。

渡すときは海李って呼んでみるか…。

そんなことを考えてみたら6時間目が終わった。

つまり放課後だ…。

「慧！今日もよろしくねー」

「ちよつ、待て」

「何よ？」

「鈴村 海李…」

「なんでフルネームで呼ぶのよ？」

「海李…、お前今日誕生日だよな？」

「うん。まあ」

なんなんだ。

この空気…。

バリ重い。

「なんつーか…ほれ、これ。」

俺からの誕生日プレゼントだ…」

そういつて俺は鈴村に近づいた。
そしてプレゼントを渡した。

「ありがとう…」

「別に好きとかじゃないから勘違いすんなよ」

「あんた最後の一言不必要」

「悪い。ま、誕生日おめでとう」

――――

私は誕プレをひとつひとつ開けていった。
最後に慧からもらったやつをあけた。

「あ、これ…」

この前、私にデパートで会ったときのやつだ。

これ私にくれるやつだったんだー！

あ、今気づいたけど慧からく海李>って呼んでもらえた」

――――

俺はその後一人で帰宅した。

味来はなぜか今日は待っていなかった。

そしてなんだ、この胸の苦しさは…。

恋か？

まさかな。

鈴村のこと…海李って呼んじまった…。

なんかおもわせぶりなこと言っちゃまったなあ。

――――

私は夏奈子に電話していた。

<あ、夏奈子ー？>

< 何ー？ >

< 慧から誕プレもらえたー >

< よかったじゃん >

< 聞いて、最後に、

別に好きとかじゃないからなとか

言われたけどもしかしたら可能性出てきたー >

< よかったじゃん、

ちゃっちゃっとかクリなよ >

< えへへ、時期ね >

決意 2

けい……。

昨日、けいのクラス覗いたらあの子と
いい雰囲気だった。

あの子にー確か鈴村 海季さんだったかな？ー
プレゼント渡したのかな？

それで好きって言ったのかな？

それでつきあつたのかな？

これからはけいの横にいるのは
私じゃなくてあの子なの？

力チ力チ。

そして瀬戸 味來は携帯を
とりだしメールを送った。

「けい……。これからはバラバラに登下校だね」

すぐにメールに気付いた俺は返信した。

「なんで？」

「だって、だって、だって、だって、」

だって、だって、だって、だって、

だって、だって、だって、だって、

だって、だって、だって、だって、

だって、だって、だって、だって、

だって、だって、だって、だって、

だって、だって、だって、だって、

「けい……この前の子とつきあったんでしょ？」

だって、の連発に思わず吹きかけたが

味來は俺が鈴村と付き合ったと

勘違いしてるように思い吹きそうなのをおさめた。
別に付き合ってたねえし、
恋愛感情は

.....

あるかもな。

味来には...これはないな。

「味来。よく聞け。」

俺は鈴村とつきあっちゃあない」

「じゃ、登下校一緒でも大丈夫？」

「ああ。仮にもし無理になったら俺から言っし、
味来も彼氏ができて無理になったら言えよな」

「うん」

そこでメールは途切れた。

俺は味来を今日も待たせた。
と思った。

いつもの場所に女子がいたからだ。

「よう」

「あれ？」

夏奈子じゃなくて慧じゃない」

「あわわ、鈴村か」

「誰だと思ったの？」

「.....味来だと思った

っ！かここでいつも合流してた」

「ふーん。

今日は私と登校する？」

「俺は別に構わんが...

鈴村は待ち人はどうする気だ？」

「夏奈子ならきちんと説明したら納得してくれる。

慧こそそのみくちゃんはどうするの？」

「味来ならテキトーに言つときゃいいさ」

「えらい薄い友情ね」

「別にただの幼馴染みだし……」

そういつつ俺と鈴村は歩きすすめていた。

――――――――――

「けー」

つてあれ？

私はけいを見つけたけどけいが女の子と

仲良さげに話しているのを見つけて足を止めた。

あれは鈴村さんじゃないかな？

そんな私にこんな会話が聞こえてきた。

「慧こそそのみくちゃんはどーするの？」

「味来ならテキトーに言つときゃいいさ」

……。

けい？

昨日私と登校してくれるって言つたよね。

テキトーって何よ。

あれ。おかしいな。

涙が出てきた。

「おい、大丈夫？」

誰かが私に声をかけた。

「うう……」

私は声をかけた人物をみた。

なんとまあ同じ高校の人物だった。

「とりあえずあの喫茶店はいるつか？」

「うん」

そして言われるがまま喫茶店に向かった。

喫茶店。

泣き止んだ私。

「あの、あなた、学校はいいの？」

「いいの、いいの。」

それと私は福山 夏奈子よ」

「福山さん…」

ありがとう」

「夏奈子でいいわよ。」

で、なんで泣いてたの？」

「うん。けいといつも

あ、けいって友達ね。」

あそこの近くで合流して

一緒に登校してたんだけど…」

「ちよつと待って。」

そのけいって沢村 慧のこと？」

「うん、でね昨日、

メールで今日からも一緒に登校してくれる

って言ってたのにね、

今日いつもの場所に行くと言った鈴村さん…」

あ、鈴村さんはけいの友達…」

「鈴村 海李でしょ。」

私、今気づいたけどあなたと一度会ってるわ」

「え…？」

「ま、その話は後ですから今は泣いてた理由教えて。」

海李が沢村と？」

「鈴村さんと話してて

『慧こそそのみくちゃんはどうするの?』

『味来ならテキストに言つときゃいいさ』

つて聞こえてきてそっから

一緒に登校しだしてそこから悔しくて泣いてたの…」

「そっかぁー。」

でも沢村とは味来は付き合っていないんでしょ?」

「うん」

「好きなの?」

「うん。大好き。」

私の初恋はけいなの」

「告白は?」

「してない…。」

今の関係が壊れるのが怖くて…」

「だからダメなのよ。」

これは絶対言っちゃダメだけど

海李も沢村が好きなの」

「え…」

「海李は時期告白するよ。」

その返答次第では味来もう

一緒に登校できないかもしれないんだよ。

味来も告白しなよ」

「でも…今の関係が壊れるのが怖い」

「今の関係が何よ。」

恋人になるには今の関係壊さなきゃいけないのよ」

「……………うん。私頑張る」

「んじゃ、学校いくとしますか」

「うん」

告白2

その日の放課後。

俺は今日も鈴村に頼まれて黒板消しをしていた。

――――――――――

私は今日なんで一緒に登校してくれなかったか

聞くためというか帰り道に夏奈子のいう通り告白をしようと

思ってた校門でいつものようにけいを待っていた。

テクテク。

ピタ。

もうひとり立ち止まった。

「あれ？鈴村さん…？」

私のつぶやきにその人は反応した。

「え、うん。

そだけど…。なんで名前を…？」

「前、川原でけいと一緒に

下校してるときに会ったから覚えてるの」

「ああ、はいはい。

味来ちゃんね」

「え…名前覚えてるの？」

「うん。まあ記憶力はいいい方だから。

で、誰かを待ってたの？」

「……………けいを待ってる。鈴村さんは？」

「ん、え、ああ…まあ……………」

言えない…私も慧を待ってるなんて…。

でも言わなきゃ。告白なんてできない…。

「……………慧を」

「アハハ。一緒だねー」

――

よし、これで黒板OKつと。

俺は下校しようとした。

下駄箱で上靴から靴に履き替えようとしていた。

「あ、沢村 慧」

「ん？誰？」

いや、顔はわかるが名前がわからん……」

「そーね。」

海李の友達としか私のことは知らないはずだもんね。

私は福山 夏奈子よ」

「福山さんか……」

で、何か用か？」

「私さー海李の友達でもあるけど

味來の友達でもあるんだよねー」

「ほうー」

「あまり興味なさげね」

「まあいちいち味來の友達覚えてるほど

俺の脳の容量大くないんでな」

そのまま話ながら校門に向かっていた。

「「け……（慧……）」」

味來と鈴村に同時に呼ばれた。

「それじゃな、福山さん」

「うん」

「「夏奈子……どういうこと？」」

味來と鈴村は福山さんのほうに視線が言った。

「あーこれはたまたま下駄箱で会ったから話ながら来てただけ」

「「そっかぁー」」

「で、俺はどっちから対応したらいいんだ？」

「慧が選びな。」

どっちを優先するか…」

「あーじゃ鈴村から…」

「一緒に帰ろ」

「んじゃ、味來」

「一緒に帰ろ」

んだーどっち優先すべきなんだ？

鈴村か味來か。

どっちも同じ用件だし…。

「わかった。3人で帰ろう」

「バカか」

「痛。」

福山さんまだいたのか…」

「海李も味來もあんたとふたりで帰りたいの。」

それを3人つて寝言は寝てからいえ」

「は…？」

「あんたは好きなほうを選べるのよ」

「えつとじゃ、鈴村悪い。」

今日は味來と帰るわ」

ということで俺は味來と帰ることにした。

テクテク。

今日は朝一緒に登校できなかったことを
せめられていた。

確かに昨日、一緒に帰れるとはいったものの…
なにもそこまで怒らなくても…。

味來が真剣な顔して言った。

「けい、私…」

「ん、なんだ？」

「けい……。」

私、けいが好き。

つきあつてほしいの」

「味來…。」

悪い。

お前を彼女とは思えない…。

俺と味來はそういうのじゃなくて

親友でおさまつとくべき…」

「それでも…」

「俺はお前を女とみれない」

「ごめんね。いきなり変なこと言つて」

「でもまあ味來の気持ちは伝わったから、

ありがとな」

翌日。味來は学校を休んだ。

告白

「夏奈子…味來だけど…今、メールできる…？」

「何？」

「昨日ね、けいに告白したの、

そしたらね、私は女としてみれないって言われたの」

「なんでそーいわれたかわかる？」

「今まで一緒にいた時間が長すぎたんだと思うの」

「そっかぁー。」

味來。お疲れ様」

「あ、これ鈴村さんに言っても大丈夫だよ」

「なーんでここで海李がでてくるのかな？」

「鈴村さんもけいが好きだから…」

「まあ聞かれたら答えとくよ」

「うん」

そこでメールは途切れた。

俺は味來に告白されてから何故か

鈴村のことを意識してしまうようになった。

授業中も休み時間も放課後も。

「あー慧！今日はいいよ」

「いや、俺がやる」

「んじゃ、待ってるから…」

「ん？ああ」

黒板消し終了。

俺は帰路につこうとした。

鈴村は丁寧にも待っていた。

「慧！」

「悪いな。待たせて」

「いいよ。帰る」

「ああ」

別れ道に来た。

「慧！私、慧が好き！

付き合おう」

「まるであたかも

俺も海李が好きなの確定的ないいかただな。

まあ俺も鈴村 海李が好きだ。付き合おう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339z/>

勘違い

2012年1月5日20時48分発行